

## 瀬戸の魚「セトダイ」

神戸市立須磨海浜水族園  
動物展示課 魚類展示マネージャー

おさ だ のぶ ひと  
長 田 信 人

### 1. はじめに

神戸市立須磨海浜水族園は阪神間唯一の自然海岸である須磨海岸に面しており、そこには水産資源の豊富な瀬戸内海が広がっている。瀬戸内海で水揚げされる水産物の中には明石の蛸や鯛、広島のカキのような全国的な知名度を誇るものからテンジクダイ(ネプト)、タマガンゾウピラメ(デベラ)などその地域で昔ながらの食材として消費されるものもあり、変化に富んでいる。

黄色と黒の太いバンド模様が特徴的なセトダイ(写真1)もそんな地域内で消費される水産物のひとつである。

今回この記事を書くにあたり、セトダイについてさまざまな情報をまとめたので、ご覧いただければ幸いです。



写真1:セトダイ

### 2. セトダイとは

図鑑<sup>1)</sup>によるとセトダイ(*Hapalogenys analis*)はスズキ目イサキ科ヒゲダイ属の魚で、近縁種にはヒゲダイやヒゲソリダイなどがある。瀬戸内海や有明海、富山湾～鹿児島県長島の日本海・東シナ海沿岸、和歌山県～宮崎県にかけての太平洋沿岸、朝鮮半島～台湾にかけて分布している。西海区水産研究所<sup>2)</sup>によると、成長は遅く満1年で体長5.4 cm、2年で8.6 cm、3年で10.6 cmとなり、最大体長は25 cmほどになるとされている。水深30～70mほどの砂泥底の岩礁に生息しており底引き網や刺し網、釣りなどで漁獲される。Soh, H.ら<sup>3)</sup>によれば主にエビやカニ、端脚類、多毛類などを食べるが、その割合は体サイズによって異なり、10～14 cmではエビの仲間や端脚類が多く、14～18 cmではエビの仲間が大半を占め、18 cm以上ではエビの仲間と多毛類が多くを占めるようになる(図1)。

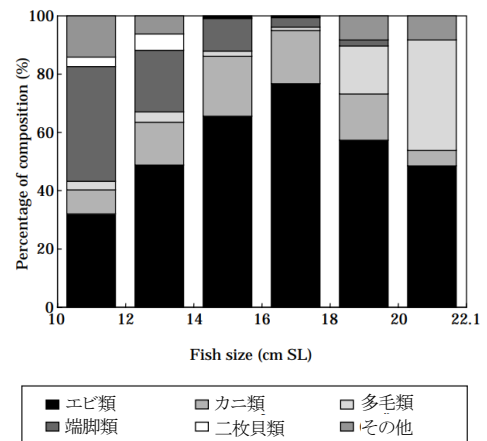


図1 セトダイの餌料組成と体長の関係

Soh, H.-Y. and Kwak, S-N. (2005)より改変

### 3. 地域ごとの利用

冒頭で地域内で消費される水産物であると紹介したが、著者があちこちでヒアリングしたところ、その評価や食べ方は地域によってさまざまであった。須磨海岸に拠点を置く、すまうら水産の代表者は「大きな魚ではない上に頭が大きいので食べる場所は少なく、刺身などには向かないが、脂ののった5月か

ら6月中旬にかけては抜群にうまい。特に塩焼きがおすすめ」との評価だが、少し西に移動した明石浦漁業協同組合の方からは「高くても1,000円/kg程度で安い魚の部類に入る。旬に値が上がるということもない。おいしいと聞いたことはあるが、食べたことは無い。大きくないので水揚げ量も多くないため、そこまで気にしたことはなかった」とのことだった。更に西にある江井ヶ島漁協ではその存在すら噂程度でしかなく、食べるどころか見たこともないということであった。これが更に西にいき広島県栽培漁業協会<sup>4)</sup>によれば、県内の忠海地方では梅雨明けに行う“泥落とし”の宴会では必ずセトダイの煮物を食したとする食伝統があったとされている。また、呉周辺でも煮つけが主流で身離れが良く、ある程度の大きさであればメバル類とほぼ同等の値段でスーパーに並ぶ魚となっていたとのことだった。

このように各地域でその評価は割れるのだが、面白いことに地方名は共通して「タモリ」であり、標準和名のセトダイより知名度が高い。タモリの由来にはいくつかあり、魚名考<sup>5)</sup>によると小範囲を遊泳することから田を見回る人の意味で「田守」とする説があるが、各種ネットによると、そのいかつい恰好から平安末期の武将「平知盛(たいらのとももり)」を偲んでそれが訛ったとする説がある。

#### 4. 繁殖生態

鎌田ら<sup>6)</sup>によると雌雄ともに体長110mm程度の個体において生殖腺重量の上昇が見られ、実際に雄で体長109mm、雌で体長112mmの個体において生殖腺の成熟が肉眼で確認されている。また、時期としては6月ごろから生殖腺重量の上昇が見られ、7月でピークとなり、8月9月と徐々に下がっていき、10月以降は一定の低い値となる。これらのことから産卵期は6月～9月と考えられている。また、鈴木ら<sup>7)</sup>が観察した水槽内での産卵行動によると、産卵の約1時間前には、雄が岩陰から別の岩陰にいる雌に対して求愛を開始する。求愛を受けた雌はこれに応え、雌雄は岩陰近くで半ば開口した口先や腹部を互いにつつき合う行動を繰り返し行う。時間の経過とともにこれらの行動は頻繁になり、産卵の30～50分前には上述の行動に加えて、雄が雌の腹部を口先で押すようにして水槽底から中層へ泳ぎあがる行動も見られるようになる(図2A)。産卵の10～15分前には雌雄は水槽底で互いの尾びれをつつき合いながら巴形となって旋回した後、水槽底から中層へらせん状に上昇する行動が頻繁に認められる(図2B)。放卵放精は雌雄が寄りそったまま、雌がやや先行して水槽底から水面に向かって急上昇し、腹部をそろえて水面直下で行われる。放卵放精後、雌雄は別々に下降して岩陰に戻る(図2C)。受精卵は卵径1.22～1.25mmで21時間～24時間でほとんどが孵化した。広島県栽培漁業協会<sup>4)</sup>によれば、孵化後3～4日で開口し、そのサイズは全長4.3～4.5mmとなりワムシを摂餌するようになる。初期の仔稚魚の飼育は生存率が非常に悪く成長も遅いが、全長20mm(孵化後60日)を超えるころになると飼育は比較的容易になる。

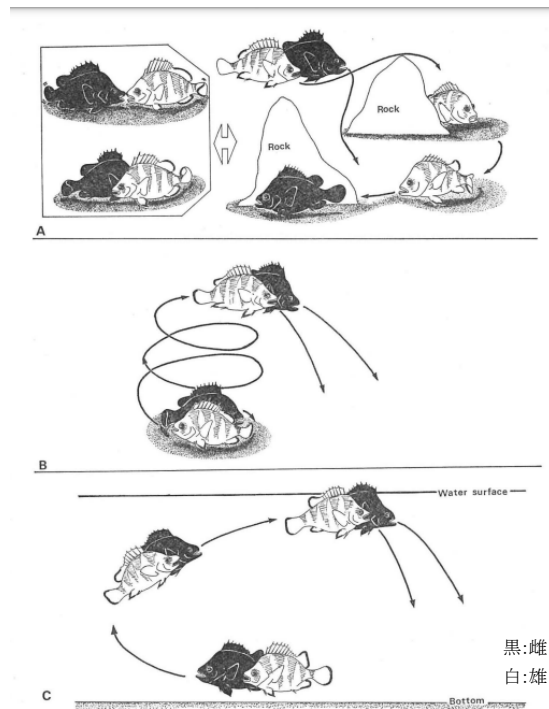


図2 水槽内におけるセトダイの産卵行動

鈴木ほか (1983)より改変

#### 5. 最後に

今回、セトダイについて書かせていただいたが、瀬戸内海沿岸地域で利用がここまで違うものとは思っていなかった。ただ、食したことのある方たちの評価は決して低くはない。そんなセトダイの水揚げ量

だが、そのみの記録はほとんど無いものの漁師からのヒアリングでは減少傾向にあると感じているようであった。種苗生産技術開発や水槽内での産卵行動の記録もあるので、ぜひともセトダイを使った食文化を過去のものとしないうように、気が付いたらいなくなっていたということが無いように、水族館などでも微力ながら飼育、繁殖に取り組んでいきたい。

## 6. 参考文献

- 1) 中坊徹次(編)(2013) 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 神奈川 941 p.
- 2) 水産庁西海区水産研究所(1986) 東シナ海・黄海のさかな. 日本紙工印刷, pp. 224-225
- 3) Soh, H.-Y. and Kwak, S-N. (2005) Feeding habits of belted beard grunt, *Hapalogenys mucronatus*, in the coastal waters off Sori Island, Yeosu, Korea. Korean Journal of Ichthyology, 17(4), pp. 258-263.
- 4) 広島県栽培漁業協会(1993) 水産種苗生産技術共同開発報告書, セトダイの種苗生産技術開発.
- 5) 柴川省造(1974) 魚名考. 甲南出版会, 兵庫 380 p.
- 6) 鎌田崇史, 坂井陽一, 橋本博明, 具島健二(2002) 瀬戸内海燧灘におけるセトダイ *Hapalogenys mucronatus* の生殖について. 生物圏科学. 広島大学大学院生物圏科学研究科紀要, 41, pp. 13-21
- 7) 鈴木克美, 日置勝三, 田中洋一, 北沢博(1983) 水槽内におけるセトダイの産卵と初期生活史. 東海大学紀要海洋学部, 16, pp. 183-191

## 春から夏へ。「晴れの国」を彩る花風景(岡山県)

関西学院大学総合政策学部 教授  
 さやま ひろし  
 佐山 浩

## 1. 味も風景も一級品・フルーツ王国のモモ

モモはブドウとともにフルーツ王国・岡山を代表する果物である。生産地の吉備丘陵は「吉備丘陵の白桃」として2001(平成13)年に環境省の「かおり風景100選」の一つに選定されている。なだらかなその地には広大な桃畑が広がり、毎年3月下旬から4月上旬にかけて一面がピンク色に染まる。とりわけ岡山市<sup>いちのみや</sup>一宮<sup>いちのみや</sup>地域(一宮山崎<sup>さやま</sup>・佐山<sup>さやま</sup>・芳賀<sup>はが</sup>など)、倉敷市<sup>たましま</sup>玉島<sup>たましま</sup>地域(玉島八島<sup>たましま</sup>など)、そして本宮<sup>ほんぐう</sup>高倉山<sup>たかくらやま</sup>の麓(赤磐市<sup>かもさき</sup>鴨前<sup>かもさき</sup>など)が代表格である。

岡山でモモの栽培が本格的に始まったのは明治の初めの頃とされる。1901(明治34)年に大久保重五郎<sup>おおくぼじゅうごろう</sup>が育てた品種が実の色から「白桃」と名付けられた。1932(昭和7)年には岡山を代表する優れた品種「清水白桃」が「白桃と岡山3号の混植園の中の実生」(有岡利幸(2012))から西岡<sup>にしおかなかいち</sup>伸一<sup>しんいち</sup>により発見された。岡山では多くの白桃系品種が栽培されているが、地域団体商標として登録されている「岡山白桃」は岡山県産の白桃の総称である。白い気品のある肌の仕上がりは丁寧な袋掛け作業の結晶である。収穫するまで風雨や害虫などから守られ、また、日光が遮られることで繊維質の発達が抑えられて口当たりが滑らかになるという。

岡山市北区の芳賀<sup>はが</sup>佐山<sup>さやま</sup>団地付近の県道238号沿い、新池<sup>しんいけ</sup>の畔には「清水白桃発祥の地」の碑が立つ(写真1)。磐梨郡<sup>いわなしぐん</sup>弥上村<sup>やがみむら</sup>山ノ池<sup>やまのいけ</sup>(現・岡山市東区瀬戸町<sup>せとちょう</sup>塩納<sup>しおのう</sup>)には大久保重五郎の顕彰碑が、赤磐市<sup>かまかみ</sup>可<sup>か</sup>真<sup>ま</sup>上<sup>かみ</sup>の旧可<sup>か</sup>真<sup>ま</sup>小学校<sup>しんがっこう</sup>跡(現・赤磐市<sup>あかいわしくまやま</sup>熊山<sup>くまやま</sup>老人憩いの家<sup>れんじんあいのいえ</sup>)には岡山県果樹振興の祖とされ大久保が師事して果樹栽培を学んだ小山<sup>こやま</sup>益太<sup>ますた</sup>と大久保両名の顕彰碑が建てられている。小山益太は1861(文久元)年、磐梨郡<sup>ひえだ</sup>稗田<sup>はいた</sup>村(現・赤磐市<sup>あかいわしくまやま</sup>稗田<sup>はいた</sup>)に生まれた。「金桃<sup>きんとう</sup>」、「六水<sup>ろくすい</sup>」の2品種のモモを生み出したほか、防虫剤として全国で広く使用された「六液<sup>ろくえき</sup>」を考え出したことなどで知られる。小山は、大原美術館の設立などでも知られる大原<sup>おおはら</sup>孫三郎<sup>まごさぶろう</sup>からの評価も高く、1914(大正3)年に大原<sup>おおはら</sup>奨農会<sup>しょうのうかい</sup>農業研究所(現・岡山大学資源植物科学研究所)の創設時に招かれた。果樹園を作り、実地指導を行うとともに農家への技術指導も行った。1924(大正13)年の小山の没後、大原<sup>おおはら</sup>孫三郎<sup>まごさぶろう</sup>は果樹園の名前を小山の雅号から<sup>らくざんえん</sup>楽山園<sup>らくざんえん</sup>とした。その功績を讃えて1935(昭和10)年には、大原家により楽山園の中に顕彰碑が建てられた(現在、顕彰碑は岡山大学資源植物科学研究所敷地内に移設されている)。



写真1 「清水白桃発祥の地」の碑

## 2. 鶴山公園のサクラ

鶴山公園は岡山県の北部・津山<sup>つやま</sup>市にある。津山城跡がその公園で1,000本ほどのサクラが石垣や2005(平成17)年に完成した備中<sup>びっちゅう</sup>櫓<sup>やぐら</sup>をバックに咲き乱れる。近くには岡山の三大河川のひとつ・吉井川が流



写真2 満開時期のサクラ

津山城は織田信長に仕えて本能寺の変で討ち死にした森蘭丸らの末弟の森忠政が、美作一国 18 万石余を受封した翌年から鶴山に築城した平山城である。10 年以上の歳月をかけて 1616(元和 2)年に一応の完成をみた。城は「鶴山城」とも呼ばれた。1874(明治 7)年から翌年には、石垣を除き、五層四庇の天守閣などの建物や門などすべてのものが取り壊されたが、1900(明治 33)年には旧津山町営の鶴山公園として開放された。公園面積は約 8.5ha である。

このサクラの植樹の中心となったのが

1905(明治 38)年に津山町議として初当選した福井純一である。私財を投じ、寄付集めに奔走したと伝えられている。サクラの本数が増えて、1907(明治 40)年頃には公園としての様相が一通り整った。さらに 1915(大正 4)年と 1928(昭和 3)年には二度の御大典記念植樹が行われ、城跡が一面のサクラで覆われるようになったといわれている。

### 3. 藤公園のフジ

藤公園は岡山県東部・JR 和気駅北東 3 km ほどの和気町藤野にあり、1985(昭和 60)年に開園した。この地で生まれ、平安遷都の推進や造営などで知られる和気清麻呂の生誕 1,250 年を記念して整備された。広さは 0.7ha ほどである。園内には、国・県・市町村指定の天然記念物 79 種類を含む 98 種類以外に海外からきたフジも植えられている。北海道から鹿児島県まで 46 都道府県のほか、中国と韓国から集められた全体の種数は約 100 種類となり、花の房の長いものから短



写真3 フジの咲く藤公園

いものまで形態はさまざまである。その種類の多さから「日本一の藤公園」として宣伝されている。花の色も紫からピンクや白いものまでさまざまなものが幅 7m、高さ 2.5m、総延長 500m の藤棚を彩る。藤棚の下は通路となっており、藤を仰ぎながら、時には長い房をかき分けながら約 150 本のフジを楽しめる。

### 4. 備中国分寺のレンゲ

吉備路は、岡山市北西部から総社市にかけての一带の総称である。春になると吉備路のシンボルである備中国分寺の五重塔を背にして、レンゲの花が絨毯のように一面に広がる。今から 40 年ほど前、化学肥料の普及により見られなくなったレンゲ畑の風景を復活させたいとの地元の人々の願いから、周辺の農家の協力を得てレンゲの種まきが始められた。当初の規模は 0.5ha と小規模だったという。

風景の中心に存する五重塔は 1844(弘化元)年頃に完成したといわれ、五重塔として重要文化財に指定されている。備中国分寺は奈良時代に仏教の力で天災や飢饉から国を守ることを目的として聖武天皇の発願によって全国に建立された国分寺のひとつである。中世には衰退し、江戸時代中期に日照山国分寺として復興した。五重塔をはじめとして現存する伽藍はすべて江戸時代に建てられたものである。



写真4 レンゲの花と五重塔

この周辺一帯は吉備路風土記の丘県立自然公園に指定されている。自然公園内には備中国分寺跡、備中国分尼寺跡のほか、5世紀前半につくられた造山古墳がある。全国で4番目に大きな墳長約 350m の前方後円墳である。

## 5. 笠岡湾干拓地の花畑

笠岡湾干拓地は岡山県の西部にあり、花畑は 2011(平成 23)年にオープンした道の駅笠岡ベイファームに隣接する。春には 1,000 万本のナノハナや 1,000 万本のポピー、夏には 100 万本のヒマワリ、そして秋には 3,000 万本のコスモスが訪れた人々を出迎えてくれる。



写真4 夏のヒマワリ

笠岡湾の干拓の歴史は江戸時代初期の新田開発に始まったと伝えられ、近世を通じて造成された約 300ha が笠岡市の基盤となっている。1958(昭和 33)年には 105ha の国営旧笠岡湾(富岡)干拓地が造成された。花畑の広がる土地は 1966(昭和 41)年に始まり 1990(平成 2)年に終了した国営笠岡湾干拓建設事業で整備された農業用地 1,191ha の一部である。島遍路や神島天神祭で知られた神島は、1970(昭和 45)年には神島大橋により本土とつながっていたが、事業が終了している現在では完全に陸続きとなっている。干拓地内には、近隣の農産物を大消費地に空輸するために飛行場(笠岡ふれあい空港)があり、防災拠点やスカイスポーツやさまざまなイベント会場としても利用されている。

笠岡湾の干拓の歴史は江戸時代初期の新田開発に始まったと伝えられ、近世を通じて造成された約 300ha が笠岡市の基盤となっている。1958(昭和 33)年には 105ha の国営旧笠岡湾(富岡)干拓地が造成された。花畑の広がる

土地は 1966(昭和 41)年に始まり 1990(平成 2)年に終了した国営笠岡湾干拓建設事業で整備された農業用地 1,191ha の一部である。島遍路や神島天神祭で知られた神島は、1970(昭和 45)年には神島大橋により本土とつながっていたが、事業が終了している現在では完全に陸続きとなっている。干拓地内には、近隣の農産物を大消費地に空輸するために飛行場(笠岡ふれあい空港)があり、防災拠点やスカイスポーツやさまざまなイベント会場としても利用されている。

### 【引用・参考文献等】

- 1) 西田正憲・佐山浩・水谷知生他『47 都道府県・花風景百科』丸善出版、2019
- 2) 有岡利幸『ものと人間の文化史 157・桃(もも)』法政大学出版会、2012
- 3) 全国農業協同組合連合会(JA 全農)『Apron エプロン』480、2018